

『日本における近代的定位の根源』

序論：憲法の不連続と日本近現代の定位不全

〈近代的定位第四回：外発的開化と近代化のポリフォニー〉 (講義10～12)

第四回参考文献

※夏目漱石『現代日本の開化』（『漱石文明論集』岩波文庫所収）（1911年）

※ハーバート・ノーマン『日本における近代国家の成立』岩波文庫（原書初版は1940年）

※夏目漱石『私の個人主義』（『漱石文明論集』同上、所収）（1914年）

※夏目漱石『吾輩は猫である』岩波全集（1905年1月～1906年8月）

※夏目漱石『それから』岩波全集（1909年6月～10月）

※石川啄木『明治四十三年四月より』（啄木日記）筑摩全集

※ミハイル・バフチン『ドストエフスキイ論』新谷敬三郎訳（原書初版は1963年）

※石川啄木『一握の砂』筑摩全集（1910年初版）

※石川啄木『田園の思慕』筑摩全集（1910年発表）

大逆事件が終わった年（1911年）、幸徳死刑後社会主義文献を読みあさっていた啄木と、大病後の漱石はわりと近い関係にあった。同じ朝日新聞を拠点として活動していただけでなく、漱石の弟子、森田草平は社会主義の外縁部にいた人物で、このころしばしば啄木と会って話している。啄木との並行関係を感じさせるのは、なによりも大逆事件が与えた影響の深さである。この年の八月に、漱石は明治の近代化を概観する講演を和歌山で行った。この『現代日本の開化』では、直接に大逆事件が取り上げられているわけではないが、日本近代の文明化のゆがみを概観するという試みそのものが、やはり大逆事件が露呈した大きな問題を反照していると見るべきである。

漱石において、近代受容の生む歪みの問題は、早くからテーマ化されていた。たとえば『猫』の諷刺の基調もそこにある。『三四郎』では、それが新しい世代の直面する混乱として素描され、『それから』ではいよいよ維新以来の開化の全体が、世代差を背景として問題視されることになる。『それから』の掲載が終わって、一年と経たないうちに起きたこの事件は、自らの文明観、明治国家観の否定的証左がそこに露呈したという意味でも、漱石にとっての定位的意味は大きかった。この問題はさらに、国家対個人という本質的な構図で掘り下げられていくことになる。大正三年の講演、『私の個人主義』がそれにあたる。

漱石のこの二つの講演は、日本の近代的定位全体にとって、対自的な分水嶺となった。それは明治と大正の境界線を劃し、大正ブルジョワジーの定位パラダイムを与えていく。標榜された理念は、利己主義から分離された主体的個人主義のエートス化であり、そのエートス化に成功した個人は、人格として、状況における有意味的な自己定位を果たすことになる。大正、昭和期の定位焦点となる、この人格の理念を構築したのが、近代恋愛小説を新聞小説として完成した漱石であり、その起点は、大逆事件が示した国家と個人の酷薄な対立であったと要約できる。

漱石の文明観、特に明治の開化の批評は、日本の近代化の全体を把握する場合にも、不可欠のモメントを抽出している。その一つは速度の問題、もう一つは外発性の問題である。個人主義を人格の理念によって主体化するとは、この外発性を内発化することに他ならないので、これを第三のモメントとして加えれば、漱石的な観点からして、日本の近代化の本質は速度、外発性、それに対する内発化としての個人主義という三位一体によって、定位モデル化されることになる。この定位構造をまずテキストに即して確認し、その内的連関、またこれまでの分析のモメントのそれぞれとの連関も探ってみることにしよう。

まず速度。

日本の近代化は、封建的集権の自壊から、絶対主義的集権の構築、そして立憲制の開始へとめまぐるしく進行した。そして大逆事件前後の現実には、帝国主義の台頭と国体論的抑圧の入り口に立っている。この全体を概観した漱石がまず強調するのは、その近代化の速さからくる余裕のなさだった。

〈(西洋の開化の) 圧迫によって吾人はやむをえず不自然な発展を余儀なくされるのであるから、今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのではなくって、ヤツと気合いを懸けてはびよびよいと飛んで行くのである。〉(夏目漱石『現代日本の開化』、27p)

この文明化、あるいは近代化の強制された速度と、そこから生じるゆがみについて、もっとも広範な、そして説得力のある研究を行ったのはハーバート・ノーマンだった。ノーマンはそこに、明治国家の特性、世界史的必然性、そして主体的達成の三のモメントを見ている。

まず封建社会の内部的危機がある(体制自壊の危機)。そこに西洋列強の開国貿易圧力が加わる。これは当然、植民地化の危険を内包していた。こうして真の〈国難〉が始まる。ここから必然的に、速度という必須の要因が浮かび上がることになる。

〈速度という時間的要因が日本の社会ならびに政治構造のうえに拭いえない特色をしるしているから、明治維新をもたらした環境を検討することが重要である。これによって始めて……内部的衰退と外的圧力に二つの要因がいかにして近代日本の陣痛期……を縮めるような結合の仕方をしたかを見いだすことができる。〉(ハーバート・ノーマン『日本における近代国家の成立』第二章〈明治維新の背景〉、32p f)

この近代化と国家再編の促進要因となった内因は、たとえば幕末の百姓一揆の多発と階級混淆（養子縁組を主体とする）の常態化や、下級武士と豪商との連携（いわゆる〈円と剣〉の結合の誕生）である。この社会変動は、それ自体組織化、構造化のモメントを内包している。それはしかし潜勢態としての構造化、組織性であって、外化した現実として見えるのは、あくまで速度であり、混乱であったことも間違いない。したがってノーマンの視点はやはり、時代内部のアングルというよりは、歴史家のアングル、マクロに事後的に反省することによって浮かび上がるアングルであることに注意しておこう。維新の変革が一時的な達成であったことはたしかだが、その速度が下部構造、経済組織に及ぶ時、さまざまな無理とゆがみが生じることになる。

ノーマンは、まずこの変動のスタートラインである幕末の社会構造とテューダー朝のイギリスの間に、ある種の類似性を指摘する。しかしまた日本の近代化が、テューダー朝とヴィクトリア朝（すなわち幕末維新の同時代）を直接連結してしまうような異常事態であったとも述べる。つまり外圧の結果、〈自由放任期〉の資本主義をいっさい体験せずに、一気に近代資本主義へと突入せざるをえなかったのである。

〈日本は経済上^{レッセ・フェール}の自由放任の段階とそれに呼応する政治的側面——ヴィクトリア朝の自由主義とを省略して、一気に封建制度から資本主義へと飛躍した。このように、速度こそは近代日本の政治、社会的形態を決定した要因である。日本は……侵略の危険を受けとめるための最新式国防軍の建設、武装兵力の基礎となる工業の開始、工業的近代国家にふさわしい教育制度の形成を同時に成しとげねばならなかったが、その速度ゆえに、これらの重要な変革は民主主義的代議制度を通じて人民大衆の手によってではなく、少数の専制的官僚によって達成されたのである。〉（同上、79p）

ここでノーマンが見ているのは、憲法発布までの明治初期の政治過程であって、大久保の内務省独裁から、伊藤たちの藩閥有司専制がちょうどこの時期にあたる。注意しておかねばならないのは、明治の末年に、啄木、鷗外、漱石がそれぞれ痛感した（大逆事件を契機として）明治政府の専制反動化は、この開明官僚たちの系譜ではなく、そこに途中から割り込んできた国体・修身グループが背景で暗躍する、そういう新しいタイプの専制であったということである。その特徴は漠然とした天皇大権の権威づけと、それにとまなう強い官尊民卑の風潮の助長にあった。

この後者の割り込みグループは、開明専制官僚からの疎外グループ、もう少し言えば落ちこぼれグループであって（元田や佐々木の履歴がよくそれを語っている）、だからこそまた表の開化制度にたいするルサンチマン、妄想的国粋の意識も過激であり、ほとんど現実離れをした観念性を示すことになる。明治初期に大きな達成を示し、ノーマンの大きな評価の対象となった開明専制と、明治末年度の国体イデオロギーに支えられた専制反動とは、担い手の質も、めざすところも大きく異なっていた。明治の政治史を全体として理解するためには、このことを弁別しておく必要がどうしてもある。それは大久保や伊藤の集権的側面が、明治初期の日本の近代化に不可欠であったというノーマンの直感を、明治後期の警察国家に傾く専制まで拡張してはならないという認識につながる。

同様に、漱石たちが始める大正ブルジョワジーの文化も、同じ専制に見えても、まったく質の違う、開明的集権ではなく、蒙昧で過激な国粹主義（つまり国学イデオロギー）によって囲い込まれていた。この官僚的専制内部の二極性を正しく見すえなければ、大正文化のみならず、漱石、啄木、鷗外たちのエートスの営為の本質すらわからなくなる危険がある（対立は敵対する他者によって本質規定されるから）。先の展開を一瞥しておけば、帝国主義から軍国日本を主導していったのは、不幸にして、すでに開明性をまったく失ったこの国粹主義者たちであったこと、そこに近代日本自壊の決定要因の一つがあったことはたしかである（たとえば開明官僚の典型であり範例であった大久保や伊藤が、僥倖に期待しつつ太平洋戦争に突き進んだとはどうしても考えられない。日中戦争ですらまったく違う展開を示しただろう）。

速度に乗って近代化を達成したのが、大久保たち開明的集権官僚の偉業であったが、それはまた様々なゆがみを残した。このノーマンのマクロの概観は、制度史としての日本近代を把握する上でいまだに最重要のテーゼであると思う。このテーゼの系として、農業問題という、近代日本にとっての宿痾の認識に至ったことも非常に重要である。それは産業構造全体のゆがみとも連結されていた。

〈明治政府の政策は、戦略的産業を創設すること、国防兵力を十分に備えること、かぎられた比較的微力な商業・金融階級に潤沢な補助金を与えて工業部門への進出を奨励することであった。この政策は反面においては、農民階級に課せられた過重な租税負担、国防関係企業にくらべて重要度の少ない企業への切詰め、ならびに、およそ国内的危機を促進し建設事業を妨害阻止するような不安定動因ないしは民主主義的抗議に対する一般的な不寛容をその特色とした（※三島通庸を代表とする土木官僚を示唆している）。〉（同上、〈結論〉 317 p）

このノーマンが概観する第一期近代日本（憲法発布までの日本）と、日清日露を経た漱石の〈現代〉を比較したばあい、まさにこの産業構造の歪みがあらゆる場面で噴き出しつつあったことが確認できる。引き金となったのは、足尾鉍山鉍毒事件だった。それは最重要の戦略産業としての銅山運営が、鉍毒の野放図なばらまきによって、農村の生活基盤を大きく破壊したことが原因である。つまりマクロに見れば、ノーマンが概観する産業構造の歪み、つまり戦略産業重視と農業軽視の二極性の上にあった。鉍毒事件の天皇直訴を行った田中正造のすぐそばに、幸徳秋水がいたこともすでに述べた。

足尾鉍毒事件の転換期的な意味は非常に大きいので、いずれまたその時期にまで本論が進んだ時点でまとめて扱ってみたいのだが、前もって言うっておけば、近代的定位の全体の分水嶺は、やはり大逆事件であって、鉍毒事件ではない。それは意味内実からしてそうだったというのではなく、意図的、制度的隠蔽によってそうなったからである。鉍毒の張本、古河市兵衛が小学校の教科書に立身出世の例として掲載されたことが、その一つの徴表だった。まさに〈修身〉的モデルが、〈国体の称揚〉につながるとされる。隠蔽は国家ぐるみであり、それを担ったのは国体・修身教育グループであった。正造の義民的エートスは、結局勝たち、古いタイプの開明官僚層にしか共振を見いだしていない（『海舟座談』に同

情的なコメントが記録されている)。このことも、上でのべた、専制の質、官僚制度の担い手の変容と大きく関係しているので、ここで一応その事実だけ確認しておきたい。正造の仕事の内実は、木下尚江や幸徳らを通じて、社会主義運動家によって継承されていくことになる。

再び速度の問題に戻るならば、制度変革の風圧という意味において、改革を担った開明官僚と改革に巻き込まれた一般民衆では、もちろん大きな落差がある。開明官僚において際だつのは、機敏な主体性であり、一般大衆において常態化したのは、その受け身性、「外発性」だった。開化はあくまで外からやってくる。そして外のものに留まるのである。

〈西洋の開化は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的というのは内から自然に出て発展するという意味で丁度花が開くようにおのずから蕾が破れて花卉が外に向かうのをいい、また外発的とは外からおっかぶさった他の力でやむをえず一種の形式を取るのを指したつもりなのです。〉(漱石、同上、26 p)

注意しなければならないのは、この外発性は文明の落差から由来することを漱石は強調しており、したがって日本前近代にも固有の開化があったことを否定しているわけではないということである。ただその前近代かつ内発的開化の程度は十程度であるのに対して、黒船以来流入する西洋の開化は「二十三十の複雑の程度に進んだ開化」であった。その落差が結局「外圧」の内実であるという漱石の認識は、冷静かつ客観的であるばかりでなく、「伝統文化」に対するある種のリベラルな受容性を示していることに注意したい。つまり彼はその意味では「洋化論者」ではなく、是々非々の精神で欧米の文物に対したということである。興味深いことだが、この姿勢は大久保の世代の開明官僚と一脈相通じるものがある(漱石は「維新の志士の気概をもって文学をやりたい」という決意を述べた人でもあった)。

開化の外発性をもたらす定位の大混乱は、漱石の世代にとっては、「神経衰弱」の原因ともなった。漱石はアイロニーをこめて、大学教授なら衰弱することがあたりまえだと主張する。大学教授がその開化の窓口になって久しいからである。

〈少し落ち付いて考えて見ると、大学の教授を十年間一生懸命にやったら、大抵の者は神経衰弱に罹りがちではないでしょうか。ピンピンしているのは、皆嘘の学者だと申しては語弊があるが、まあどっちかといえば神経衰弱に罹る方が当り前のように思われます。〉(同上、36 p)

開化性の神経衰弱は、常識となり、ややポーズですらあったことが当時の文献を見るとわかるが、しかしそれはまた強い心因性の疾患を引き起こすこともあった。ほかならぬ漱石自身がその例である。結核、胃弱、そして神経衰弱は、たしかに身体面から見た日本近代の基本的な徴表でもある。日露戦の戦勝はかえって文明化の軋轢を強めた。したがって、この文明病に抗して、そろそろ開化の内発化をしなければならない、これが漱石のアドヴァイスである。

〈外国人に対して、乃公の国には富士山があるというような馬鹿は今日は余りいわないようだが、戦争以後一等国になったんだという高慢な声は随所に聞くようである。なかなか気楽な見方をすれば出来るものだと思います。ではどうしてこの急場を切り抜けるかと質問されても、前申した通り私には名案もない。ただ出来るだけ神経衰弱に罹らない程度において、内発的に変化して行くのが好かろうというような体裁の好いことを言うより外に仕方がない。〉(同上、38p)

この「内発的变化」の方法が、人格性と結びついた「個人主義」だが、それが国家と対比される場合、比較の基軸はあくまで社会倫理である。そこにこの時期の漱石の定位思考にあてた大逆事件、および「国家問題」の大きさがわかる。それは社会倫理そのものを圧迫し、歪める強権として含意されているからである。そしてまたまさにこの個人と国家の対比によってこそ、近代的エゴは、再度共同性を、つまり倫理性を獲得するのだった。

〈いやしくも倫理的に、ある程度の修養を積んだ人でなければ、個性を発揮する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もないという事になるのです。それをもう一遍いい換えると、この三者を自由に享け自由に楽しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起こって来るというのです。〉(漱石『私の個人主義』、126p)

近代的自由は、国家からの自由であり、それは古代的自由、たとえばポリス市民の政治参加の自由と根本的に区別されるということは、国家論、憲法論の常識になって久しい。しかし漱石の観念する個人は、この放任的自由の領域に自己実現をはかる近代的エゴとはその定位基軸を異とする。それは〈権力〉(国政参加を含む)と、〈金力〉(実業活動)を、「個性の発揮」と並べて挙げ、三つの活動領域はともに〈人格の支配〉を受けるとされるとされるからである。

そのためには自由が不可欠だが、それはミルたちの「自由放任」の意味での自由ではない。ヨーロッパ的カテゴリーで言えば、近代的自由と古代的自由の融合の姿、つまり東洋の文脈で言うと、士大夫的な公人性と近代的エゴの「己への誠」(代助の最後の抛り所)との調和、あるいは融合の姿、それが漱石の人格主義の核心部にある。この調和、融合は、おそらく明治人の定位意識に固有のもので、たとえば樋口一葉にもそれが如実に認められるし、啄木においては、『ローマ字日記』のエゴと、評論の公人性とのやはり一つの自我への包摂として感得することができる。この固有性も、おそらく最初にあげた、近代の四期区分と連動しており、この公人的私人という独特の混淆が見られるのは、近代前半期に人となった個人、つまり広い意味での明治人に限られるのではないかと思う。同じ混淆をたとえば、川端や芥川に求めるのはまったくの徒労に終わるだろう。賢治の公人性は其中で独特の展開を遂げるが、それは漱石の意味での〈個人主義〉の発展型ではない(これは次節でまた検討する)。

したがって、漱石の〈個人主義論〉の定位内実の過半は、実は〈近代的公人論〉であり、もう一步言えば、その立場からの国家イデオロギー批判でもある。漱石はそれを〈国家主義〉として提出するが、その実体は、〈国学的国家主義〉、つまり大逆事件のシテとしての修身と治安のマニアたちである。これは彼の言葉の端々から透けて見える。たとえば次のような面白い比喩。

〈国家は大切かもしれないが、そう朝から晩まで国家国家とってあたかも国家に取り付かれたような真似は到底我々に出来る話ではない。……豆腐屋が豆腐を売ってあるくのは、決して国家のために売って歩くのではない。根本的の主意は自分の衣食の料を得るためである。しかし当人はどうあろうともその結果は社会に必要なものを供するという点において、間接に国家の利益になっているかも知れない。〉(同上、134p)

国家主義と個人主義の対極性は、漱石の場合、維新開化のマクロの時勢の中でまず位置づけられた。それは平たく言うと、もう国家危殆の危機は去った、個人の自由が展開する時代の余裕が生まれているという認識である。

〈一体国家というものが危くなれば誰だって国家の安否を考えないものは一人もない。国が強くと戦争の憂が少なく、そうして他から犯される憂がなければいほど、国家的観念は少なくなって然るべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入ってくるのは理の当然と申すより外に仕方がないのです。〉(同上、136p)

今の日本はたしかに貧乏で国も小さい。まったく安泰というわけにはいかない。だからまだ国家のことを案じる必要はある。しかしすでに今つぶれるかどうかという状態にない以上は、「そう国家国家と騒ぎ回る必要はない。」これが漱石の状況判断で、だから国体論的国粹は、必然的に、「火事が済んでもまだ火事頭巾が必要だといって、用もないのに窮屈がる人」と同じだとされるのである。

もう一つの国家と個人の対極性は、個人主義のめざすべき価値、人格的倫理性と関係している。漱石は、国家にはさしあたりこの倫理性が期待できないと述べる。ここには国体論的国粹を越えた、帝国主義的弱肉強食に対する根本的な批判が隠されていると見てまちがいない。

〈御注意までに申し上げて置きたいのは、国家的道徳というものは個人的道徳と比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。元来国と国とは辞令はいくら八釜しくつても、徳義心はそんなにありやしません。詐欺をやる、誤魔化しをやる、ペテンに掛ける、滅茶苦茶なものであります。……だから国家の平穏な時には、徳義心の高い個人主義にやはり重きを置く方が、私にはどうしても当然のように思われます。〉(同上、137p)

個人主義は、漱石の場合、在野主義、つまり官職を離れ、〈職業人〉として生きることと不可分の関係にあった。その逆側におそらく、〈遊民〉、あるいは〈太平の逸民〉(『猫』)

があり、これは彼自身のの出自階層である、不在地主層に共通する浮遊した生活形態である。漱石は繰り返しこの〈遊民〉を批判的にテーマ化している。それは日本近代のゆがみを、まさにその階層に感じていたからではないかと思う。この〈遊民〉の自己否定が『それから』のとなった。自我意識の極度に発達した「高等遊民」代助は、〈己の誠〉を通すため、そして「好いた人」三千代との生活にはいるため、職業探しをするところで、物語は終わる。これもまた分水嶺の一つと言ってよいかもしれない。代助は不在地主、寄生地主の世界を清算することで、本格的近代へ、つまりウルフやケインズたちが実践し、理論づけた「ジョブホルダー中産」の近代へと足を踏み入れる。この放擲と新しい始まりこそが、職業社会に移行しつつあった大正期市民への定位指針を与えることになったのだった。そういう風に、漱石の個人主義の果たした、本格的に近代的な定位機能を評価できるだろう。

明治的定位の中で、在野精神の果たした意味は莫大に大きい。最初に「政治の下戸」、福沢が登場し、その幕引きは、この「人格的個人主義」を実践する代助＝漱石がいた。しかしまた、二つの在野精神は呼応しながらも、違った状況を眼前にしている。諭吉にとっては、国家はまさに「火事頭巾」を必要とする危殆に瀕したものであった。したがってここでは、在野において「国民意識」そのものを創出することが喫緊の課題となる。国家はまだ生成中、草創期であり、彼はそれを脇からサポートするという意識を持つ。それで十分だった。もちろん民権運動末期の闘争の酷薄さには、福沢も危機感をもったが、やはり立憲の事実は大きかった。公人意識は在野において、充実した活動領域をつねに見いだしている。これが福沢の啓蒙活動の総括たりうるだろう。

同じことは漱石には言えない。彼の個人主義が、エートス的な定位体としてまとまりを見せたのが、まさに大逆事件以降の国家主義の台頭に対抗してのものであったことが、その複雑な事情をよく物語っている。国家と国民をまだ調和的に連結できた福沢の時代は、決定的に終わってしまったのである。個人における人倫性は、国家強権とどう対峙すべきか、これが大正、昭和の定位主題となっていく。

速度と外発性の問題にもう一度もどって、当時の混乱状況そのものを概観すると、そこ第三の定位事象、第四の定位事象が派生していることがわかる。つまりポリフォニーと「一身二生」（福沢諭吉の用語）の現象である。それは開花期に特有の潜勢的な主体性の発現、構造化であったが、それがこの明治末年の時期まで持ち越されていることが、特に漱石の現代小説世界に反照している。

まず、かなりの速度をもって、開化が押し寄せる場合、その開化内部の前後関係、論理関係がわからなくなる。これはすぐ理解されるだろう。明治期の政治思想一つとっても、ルソー、ミル、スペンサーの受容がほぼ同時に行われている。芸術文化の受容もまったく同じ同時性、前後関係の混乱あるいは消滅が常態化していた。これはすぐわかる事実だが、もう一つその並列的混乱の奥に隠れていて、すぐには意味内実がわかりにくい現象は、自らの前近代的伝統そのものが、系譜的前後関係を脱色され、横並びに、共時的に感得されることである。これはたとえば幕末に特徴的な思想的並列から始まるのだが（本論一章で検証する）、それが明治に持ち越されると、封建的中世、また王制的上古の並置がしばしば行われるようになる。前近代はともかく開化より以前であるから、その前後関係は見や

すい事実であるはずなのに、並置がこうして前近代の内部にまでおよぶと、すべての思想的、社会的ファクターが、まるで一気に同時に生じて押し寄せるような錯覚すら生じていく（明治人の定位心象において）。これを一応「定位のポリフォニー化」と呼んでおきたい。この相関化された並列性は、文明受容の速度と外発性の一つの帰結でもある。

少しわかりやすい例をあげておこう。まず前近代は開化の中で横並びに残存していた。それがむしろ日常風景でもある。『猫』の吾輩君は、二弦琴という古風な琴を教えている師匠のところにいる三毛子さんと「男女交際」を行っているのだが、師匠は開化の東京を嫌うあまり、女中とこういう会話をかわす。

〈「それに近頃は肺病とか云ふものが出来てのう」「ほんとに此頃のように肺病だのペストだのって新しい病氣ばか許り殖えた日にや油断も隙もなりやしませんので御座いますよ」「旧幕時代に無い者に碌な者はないから御前も気をつけなさいといかんよ」「さうで御座いますかかねえ」〉（漱石『吾輩は猫である』60p）

こういう骨董的な家が、英語教師苦沙彌先生のすぐ隣に住んでいるということが、明治の日常風景である。この「隣は何をする人ぞ」的なモザイク性は、やはり速度と外発性、両者から生じる都市モジュールのポリフォニー化と本質連関していることが直感されるだろう。

ポリフォニーは、個人においては、たとえば装飾的なモザイクとしての趣味の並存をもたらす。『それから』の主人公代助は、先鋭化した近代的自我意識の持ち主でありながら、あによめ 嫂の梅子となぜか気が合う。その梅子は典型的なこのモザイク趣味の持ち主だった。

〈代助はこの嫂を好いてゐる。此嫂は、天保調と明治の現代調を、容赦なく継ぎ合わせた様な一種の人物である。わざわざ仏蘭西にゐる義妹いもうとに注文して、六づかしい名すこがのつく、頗る高価な織物を取寄せて、それを四五人で裁たつて、帯に仕立てて着て見たりする。後で、それは日本から輸出したものだと云ふ事が分つて大笑いになつた。三越陳列所に行つて、それを調べて来たものは代助である。夫それから西洋の音楽が好きで、よく代助に誘われて聞に行く。さうかと思ふと易断うらなひに非常な興味を有つてゐる。〉（漱石、『それから』、339p）

この嫂のモザイク性を見て、読者のわれわれがどの程度違和感を覚えるかというのも、面白い問いではないかと思う。もしいして違和感がないのなら……われわれ自身もいまだに開化におけるモザイク性、ポリフォニー性の心性を維持しているという証拠なのかもしれない（わたしは正直違和感はなかった）。

しかし漱石の真の意図は、外発的開化のモザイクを、こうして面白いスケッチとして提出することにはない。『それから』に即して言うなら、嫂の穏やかな共時的受容性は、代助の父長井得との厳格な通時性、その一環した忠孝的倫理性との対称性において、代助の定位世界の両極を形づくるという、構造的な課題をおわされていることがわかる。

〈代助の父は長井得といつて、御維新のとき、戦争に出た（※戊辰戦争のこと）経験のある位な老人であるが、今でも至極達者に生きてゐる。役人を已めてから、実業界に這入って、何か彼^{なに}か^{かに}してゐるうちに、自然と金が貯つて、此十四五年来は大分の財産家になつた。〉（同上、338）

この得もまた、典型的な「外発的開化」の人である。白刃切り結ぶ幕末維新を生き延びた志士として、まず中級の官僚になり、そこで資金をつくり、実業に転じて大成功する。つまり空間的モザイクではなく、時間的な対位法を一身で体現する、典型的な「一身二生」の成功者である。問題はしかし、速度がここでも働くことだった。近代的エゴとしての代助は、修身齐家治国平天下を肉体化したような志士としての父に、敬意は感じるものの、その道徳をそのまま自分のものとするにはできない。そればかりではなく、父の仁義忠孝は新時代への順応によって著しく形骸化し、その形骸化によってかえって周囲への強圧度、たとえば息子代助への圧力（たとえば縁談をめぐる）を強めていることを知っている。

〈實際を云ふと親爺の所謂薫育は、此父子の間に纏綿する暖かい情味を次第に冷却せしめた丈である。少なくとも代助はさう思つてゐる。所が親爺の腹のなかでは、それが全く反対に解釈されて仕舞つた。何をしやと血肉の親子である。子が親に対する天賦の情合が、子を取扱ふ方法の如何^{いかん}に因つて変る筈がない。教育の爲め、少しの無理はしやうとも、其結果は決して骨肉の恩愛に影響を及ぼすものではない。儒教の感化を受けた親爺は、固く斯う信じてゐた。〉（同上、341 p）

つまり……家父長的修身の強制である。代助の父は維新をにない、近代日本の実業をにない、そしていまだに修身の篤い信奉者として、新世代の代助に対してゐる。この基本構図が、啄木の見た「強権に参加すらできない青年の疎外と閉塞」と同一のものであることに注意しておこう。さらに五條子爵家の父子における齟齬も、この一つの系として見ることが出来る。父子爵が、勅語的神話の側にいることは明らかだからである。

啄木も父を東京に呼び寄せたものの、自分の生活とのリズムが合わないことを嘆いた。それは結局、明治という時代の推移の早さに原因があるようだと彼は感じた。

〈人間が自分の時代が過ぎてかうまで生き残つてゐるといふことは、決して幸福な事じゃない。殊にも文化の推移の激甚な明治の老人たちの運命は悲惨だ。親も悲惨だが子も悲惨だ。子の感ずることを感じない親と、親の感ずることを可笑^{おかし}がる子と、何方^{どちら}が悲惨だか一寸わからない。〉（啄木、『明治四十三年四月より』四月一日条、177 p）

新旧のモザイク的並存と、世代差の酷薄は、速度と外発性の重合した日本近代における定位の特性である。しかしこの後発的状況から発する、ある種の現代性（定位の現代性）は、日本に限られたものではなかった。文明化における、資本主義化における後進国ロシアでの「遅れた開化」がやはり、時間的要因の弱化（前後関係の混乱）、そして空間的並置にいたつたことが観察されるからである。その結果として、日常の定位感覚がポリフォ

ニー化し、その過程の全体は、ロシア文学独自の構成法、詩学を生んだ、それがドストエーフスキイの「ポリフォニー・ロマン」であると、バフチンは主張する（ミハイル・バフチン『ドストエーフスキイ論』）

わたしがポリフォニーという言葉、明治的定位の特性として特に選んだのも、実はバフチンのこの仕事の連想からだ、それはドストエーフスキイの創作上の原理を明治にあてはめようとするものではない。むしろこのポリフォニーという定位理念そのものが、ロシアの思想世界の多元性、同時性と、明治の特に初年度の思想定位状況のやはり多元性、同時性を統一的に把握するための絶好のモデルであると感じるからである。したがってここで少しだけ立ち止まって、その共通のシンタクス構造を確認しておきたい。

まずバフチンは、後発的資本主義と、社会状況のポリフォニー性は本質連関すると指摘する。状況自体のモザイク性が、多元的多声的な思想世界、すなわちドストエーフスキイ的な〈イデーの人格化〉の前提であったと考える。

〈ポリフォニー小説は、資本主義期にのみ生まれえた。そればかりではない。ロシアにこそ、この小説に最も適した土壌があった。資本主義のロシアへの到来はほとんど壊滅的であり、社会的諸世界、諸集団が資本主義の緩慢な到来の過程の中で、その固有の閉鎖性を西洋のように弱めることなく、その多様性をも損なわなかった。そこでは停滞する社会生活の矛盾の本質が、平静な観照者のモノローグ的意識の枠内からはみだして鋭く露呈し、一方では拮抗する思想から現れ出て、ぶつかりあう諸世界が、まことに鮮明な個性をそれぞれ主張するのである。そこからまさに、ポリフォニー小説の多元的、多声的な本質の、客観的な前提条件が形成されていったといえる。〉（ミハイル・バフチン『ドストエーフスキイ論』第一章〈ドストエーフスキイのポリフォニー小説と従来への批評〉、32p）

明治はもちろんだストエーフスキイは生まなかつたし、その文学的営為の大半は（すくなくとも漱石の登場あたりまでは）文体の近代化、つまり言文一致と写生文の汎用化に費やされた。ポリフォニー性を有する作品も、『彼岸過ぎまで』や、『行人』、そして未完におわった『明暗』にはその萌芽が見られるものの、十全に展開されているとはいえない。しかし作品ではなく、作者、読者、一般の人々の日常を見ると、そこにはまさにポリフォニー的並存と多声的なもつれあいがある場面で見られた。これはこの時代の、特に書簡や日記を読めばすぐに浮かび上がる基本的な事実である。つまりこうも言えるかもしれない。日本近代はドストエーフスキイは生まなかつた、しかしドストエーフスキイの小説世界に登場するとなぜかぴたりとはまるような、そういう〈思想〉に支配された大量の現実の人々を生み続けていた、と。

これはドストエーフスキイをもって、一つの尺度として、明治人をはかるという意味ではもちろんない。しかしバフチンのポリフォニーの理念が持っている、本来的な可能性には、後進国の過渡期における定位の混乱、その主体的回復といった内的運動を包含している面が確実にある。この「拡張されたポリフォニー理念」を明治にあてはめて考えたみた場合、あの速度と外発性の競合、重合という明治特有の現象が、あるいは固有のものでは

なく、資本主義化、近代化の後発性にとまなう、ある種普遍的な位相を表現しているのかもしれないという推測が成り立つ。

たとえば新聞というメディアもまた、固有のポリフォニーを持っている。一面、二面、三面というだけで、事件のジャンル分けまでできてしまう不思議さ。それが一束の、きょうの朝刊、夕刊の中に収まってしまう。そしてまた一面を広げれば、政経のあらゆるモザイクが「目立ちたがり」の見出しとともに目に飛び込んでくる。それは現実社会で同時進行中の複雑な社会過程、そのポリフォニーの写像そのものであるとも言える。だからこそまたドストエーフスキイは、ジャーナリズム、特に新聞に異常なまでの関心を持っていた。小説の取材源として活用したばかりでなく、人々にも熱心にその購読を推奨している。

〈あなたは何か新聞を取っておられますか？是非お読みなさい。今はそうするより他はありません。時勢に遅れるからというのではなく、公私を問わずあらゆる問題の関連が、目に見えて強く、鋭くなってきているからです。〉（同上、『ドストエーフスキイ論』中の引用、46 p）

バフチンはこの情熱の中に、「一日の断面の中に多彩きわまりない矛盾だらけの素材が並び、たがいに拮抗して繰り広げられている現代社会の矛盾を生々しく映し出す新聞というもの」と、彼の創作方法、つまりポリフォニー・ロマンとの本質連関を認めている。この方向での類推を続けるならば、明治人もまた食欲な新聞読者であり（一葉や啄木の例）、代表的な知識人も新聞人であるか、新聞を発表の場としていた。たとえば漱石の小説の主な発表の場は新聞である。そればかりではなく、その新聞に登場する三四郎や代助は、やはり並存しつつ、読者の心象に生き続け、首都東京を徘徊し続けることになる。これもまた一つの「断面」であり、「多彩きわまりない矛盾だらけの素材」として、読者の定位世界に提供されていたと言えるかもしれない。このアングルから見れば、漱石の登場人物は、たしかにおおむね中産かその周辺という階層的な枠づけはあるものの、その多彩さ、多様性は、同時代文学の中で（西欧と比較しても）、群を抜いており（猫までいるのだから）、その意味では全体として大規模なポリフォニー・ロマンであった。だとすれば、それが新聞によって媒介されたところにも、社会と創作世界の多声的共振を認めることができるかもしれない。

帝政ロシアと明治日本の後発資本主義的ポリフォニー性をつなぐ、もう一つの要因は、農村と都市の並存である。これはつまり資本主義化の過程における、農村人口の都市への流入とつながっているが、それだけではない。都市人そのものが、たとえ労働者ではなくとも、農村的背景をごく最近まで持っている（一代地主の子であったドストエーフスキイ自身が、このカテゴリーに属する）。あるいは本人が農村出自であることが、十九世紀ロシアにおいても明治日本においても共通に観察される。同じことはたとえば、イギリスやフランスには言えない。都市化、あるいは農村の収奪（囲い込みのような）がずっと前にすでに終了しているからである（ドイツがちょうどロシアとイギリス、フランスの中間に位置する）。

この過程の資本主義的側面は次節でまとめて考察するが、ここではともかく、心象における、定位における都鄙の並存ということ強調しておきたい。漱石はたとえば基本的には都市人ではあるが、教職の履歴において、地方をかなり長く体験している（『坊ちゃん』の愛媛、また熊本の第五高等学校）。鷗外は地方都市津和野の出身である。そして左遷先は地方都市小倉だった。やはり農村と都会に近い二元性がそこには観察される。啄木はもちろんこの両極性を身をもって体験し続けた。その啄木はまた、都会にあつて故郷を思う、代表的な詩人でもあつた。

〈ふるさとの訛なつかし
駐車場の人ごみの中に
それを聴きにゆく

ふるさとを出で来し子等の
相会^{あひ}ひて
よろこぶにまさるかなしみはなし

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな）（石川啄木 『一握の砂』）

啄木の歌集で最も愛されたものが、こうした愛郷の歌であり、彼はまさに愛郷心への共感によって国民詩人となつた。そしてそれは偶然ではない。ちょうど啄木の思春期、青春기에、第一次産業革命が始まり、本格的な都鄙間の人口流動性が生じた。しかしそれは次節に概観するように、徹底したデラシネ化による農村から都市への人口流入ではなく（イギリスの〈囲い込み〉をモデルとする）、中途半端な出稼ぎを主体とするもので、農村にも都市にも半失業の浮動人口が大量に発生した。食うや食わずで地方と東京を行き来した啄木自身、その一人である。こうした浮動状態においてこそ、二重の思慕、憧憬は強まつた。つまり田園で都市へ憧れ、都市に住むようになると、今度は農村の故郷を思慕するという、都鄙間での憧憬の往復運動である。啄木は二つの憧憬を、繊細な感覚で弁別した。

〈田園にゐて都会を思慕する人の思慕は、より良き生活の存在を信じて、それに達せむとする思慕である。楽天的であり、積極的である。都会に於ける田園思慕者に至つてはさうではない。彼等も嘗て一度は都会の思慕者であつたのである。さうして現在に於ては、彼等の思慕は、より悪き生活に墮ちた者が以前の状態に立ち帰らむとする思慕である。たとひその思慕が達せられたとしても、それが必ずしも眞の幸福ではないことを知つての上での思慕である。それだけたよりない思慕である。絶望的であり、消極的である。またそれだけ悲しみが深いのである。〉（石川啄木『田園の思慕』、290p）

ここにもある種の〈一身二生〉が存在するが、それは維新の志士たちのそれが近代国家の生成という大事業を廻ってのものであったのとはちがひ、はるかに等身大で、国民的で、そして産業化の刻印を帯びている。しかしまたそれは、遅い資本主義特有の定位のモザイク化とポリフォニー化を伴ったことは、啄木という国民詩人の存在自体が実証していると言ってよい。

この二極化において、基底的な心性が覚醒することがある。それは〈ふるさとの山〉に即して言えば、神が住まう山の心象だった。たとえば次の啄木の歌には、そうした古層のアルカイズムが透けて見える。

〈目になれし山にはあれど
秋来れば
神や住まむとかしこみて見る〉(啄木、同上)

これはたとえば、次のような相聞歌風の感慨とあいまって、『伊勢物語』あたりの、古風な花鳥耽溺を生む。

〈風流男は今も昔も
泡雪の
玉手さし捲く夜にし老ゆらし〉(啄木、同上)

花鳥と花鳥的詠嘆が、産業化の進む日本近代においても、こうして本質的な抒情の器となりえたことも、ジャンルにおける並存とポリフォニーの証しとってよいかもしれない。特にそれが最古層の集団的心性、アニミズム的心性を覚醒する契機ともなるという、独特の定位運動が重要であり、これは日本近代の基底そのものとも関わってくるように思う。この問題は、次節で賢治におけるアニミズムの覚醒とその習合的機能を追跡しながら、まとめて検討してみることにしたい。ここではともかく、速度、外発性といった要因で始まった近代が、こうした最も主体的、かつ集団的な情念型パストフォルメルを覚醒させることもあったという、その逆説を確認しておきたかったのである。

近代的定位における、多元性と一元性の両極的対立は深いところで本質連関している。定位の前衛的ポリフォニー性は、逆側の後進的、専制的一元性と、なぜかしばしば結合されているからである。ドストエーフスキイのロシアは、もちろんツァーリズム専制のロシアであり、漱石の日本は、「国体」が先祖返り的な専制のチャンスを窺いはじめた時代でもあった。専制は、本来は多元性、多様性を圧殺する。これは時代と場所を問わない基本的な事実だが、その専制の枠内で、どうしてか突然、定位の多元性、多声化が爆発的に進行することがある。それがプーシキンからチャーホフに至る時代のロシアであり、福沢から漱石を経て賢治にいたるまでの日本近代であった。それがなぜなのか、なぜ多元性が爆発しうる専制と、そうではない、たとえばナチズムやボルシェビズムのような専制があるのか、これはおそらく近現代の定位位相の全体に関わる本質的な問いではないかと思う。

ひるがえって、民主主義体制を概観した場合、そのイデオロギーと制度は、本来多元的自由を保障する最善のものであるという自覚をもち、制度の細部もそのように仕上げられている。しかしでは、戦前の日本と、戦後の日本のどちらに多元性、多声性、もう一言いえば生態系に通じる多型性と相互扶助があるのか、これはわたしたち現代日本人にとっては深い反省を促す問いであるかもしれない。おなじく、十九世紀のロシア文学、文化の豊穡と、二十世紀アメリカ文学、文化の総体的なモノトーンさ、その意味での貧しさを比較してみるばあい、専制対民主の制度的対称性と、文化的豊穡とのあいだに大きな齟齬、ギャップがあることに気付くかざるをえない。このギャップは、おそらく制度の本質というより、制度と日常的現実の二元性が生む、なにかの要因が関係しているのではないかと推測させるものがある。この推測もまた、われわれがめざすべき、一つの近現代、一つの日本的現実を把握するための導きの糸となりうるかもしれない。そしてその糸はまた、ポリフォニー性、多元性、多型性と不可分の関係にあるはずである。そうしたことを予感しつつ、漱石の文明論の持つ大きな定位的意味を、いまいちど確認しておきたかったのである。つまり課題はやはり一つである。

外発的民主主義を、内発化すること。

(第四回テキスト終わり)